新局玉石童子訓

巻三十

東京帝国大学
13
1277
45冊

1279
45

村田

新局玉石童子訓巻之三十

東都　曲亭主人口授編次

第六十回

魚丸妖魔を對治して絶ゆる家を興す
晴賢命を免まぬかれて夜三池邸を走る

却説和田十郎正忠大江杜四郎成勝八防守筑四郎季彦杵臼入道趙心と共に
侶ふ奈良櫻八重作次世見越松時八鶴脛奈我四郎鴨脚短平等以下の殘
兵四五百名を相俱して阿甦寺ふかり來ふければ魚丸母子閑廂和尚ハ共ふ出迎
相労ひて引く客殿ふ圍坐ゑ。士卒ハ都て相別れて一隊毎ふ憩所ふ居り或ハ
金疳児を勦て或ハ疲ゑる馬を洗ひ或ハ繕ひ或ハ眠て睡ふ就も多くハ開ゞ中ふ正忠成勝八重作時八奈我四郎短平ハ共ふ
客殿ふ居り魚丸の實母周晋比丘尼と迭ふ之ゑの日誼あり却今日の闘戰ふ

く敵の陣中に怪しき少女立出て猛風を起すと戰ひしが敗軍をする。其日の顛末は
はらん折もよく防守杵臼の援兵によりて萬死を出て一生を得るけるの崖畢と共倡に
出て告るとうち笑く魚丸母子困廐和尚いへばさらん外に洩せく沙弥小僧まで感嘆
せざるはなかりける。有斯一程に日は暮て夜は初更に近けれども通能正義樅二郎押繪
はいかに来れども来ざりしが正忠成勝八重作等又あるとのみ出て倘陣殺ま
うん狭然らぬ風に吹仆されて身を傷まやと思ひしに安否を知るに由なければ時八奈我四
短平等も部しと素んん狭とも慌るを成勝推禁めて已ねく開る益なし。憶に通能は
懷に抱る仙丹あらん非如深痍を負ぬとも自療の即功なるまじ又小十郎韓錦婦
人なれども押繪少女は共に蓋世の武勇あり。敵の虜になるべくもあらず今少選俟ばや必
信あるべきうんとの詞なれども訖ら出門に来て敲者あり。時八早く洩せてたれあらぬ歟と
ろに奈我四郎短平も共倡に身を起しと出て問く思ひの程に峯張柴六郎通能。

和田小十郎正義韓錦樅二郎茂洋。其女弟押繪等は既にしかつ来り躰く囲
坐に入りしが正忠成勝八重作等はその差を相賀して今日の安危を問ひ通
能等も人々の無異に歸陣を喜び祝して却今日の難戰を迭代に説示す通能の射
藝正義の投石茂洋押繪の胆畧武勇ヨリ勢の敵を殺脱て敵の頭人西三名に
浅痍深痍を負せる。溝川橋の退口より敵に困とて追むるける事の為体を首を
通能正義茂洋押繪は憶に路に迷ひて能與村なる荒社に一雫時憩ひて在り
しなり。且其頭なる池水を衣を洗ふ賤婦に路次を問く欲るより不憚なる健
宗の養母大刀自の少しく時嫉妬の故に能與院なる辨天堂を改め黒闇天を
祭るとして枉津天女と喚做なり。其後深信懈怠の這回又大刀自は健宗の敗
軍に怕れて黒闇の枉津天女に祀りて断食なりまで深信祈念を凝しが仏恩
神舊縁に惹れて健宗を祐助るとの故に彼荒社なる。枉津の木像を移して能與

の館に在りとふと彼賤婦の格言正論人意の表に出ずる者多く論じて相別るる時
形に見えざるりーと。然れば昔年大刀自に棄却せられて件の池に沈淪らまーとふ辯才
天の化現ならんと思ふに。又能與院頽廢して彼村衰微あるとぞ。つる隨に
漏れ著るる。甲一語乙一言語と續足らざると補ひて備に告る所ゞ中に通能の赤ふ
ち。憶に曩裏に虜にあるる。敵の頭人竹木虎狼三牛鬼黒九郎名る兩三名或の
程に拔脫去て今日健宗の陣中に在て我們を敷まく者るも亦是枉津の幻
術ならん。然れば去れ彼陣頭に頭出し怪少女の猛に猛風を起あへ。枉津天女の
化現ぞ。健宗と資助ーへ此故に船方の勇士を撓敗軍にあるめら一箇も陣殺
せざりーへ邪に正に勝むとふ古語さへ思出られて久後憑しくはとふ。一五一十の話說に正
忠成勝以下の衆人側聞ち。魚丸母子兩人相和尚に至るまで驚嘆せざるふ者る
く。共に拍掌し感悅して。時今澆離に賢とのべ。鬼神の出沒るふあらべ其善神い

善人に福。早蠅如惡神に惡人に辛ひまるも。自然の義ぞ怪むに足らず。鄙語に云
棄る神あれば資る神のあらばぞと。齊一唱嘆まるける。所ゞ中に正忠に沈吟ーたる額と
拊て呟くぶ如に彼神女の辨論に物怪變化と衣に附く傳染香に壁言られに實に是
的論と憶に人死ーたるまゞ葬らざる者に。倘猫兒の憑とあれば其死人勃然と身を起
ちて走出ると禁る者に打仆され傷つけらるも稀ぞ是あり。人其死人を見て猫兒を見
ざれば並て怪を怕る而已。則是物怪と世に物怪と云者に不憶起るもあれどまゞ人の
一念ーて外より惹出も靈あり。物に憑て奇怪を做まゞ是ふらずとそれを思べ。枉津天女の
木像の形ーて怪異を做せるもの理とて悟るべ。と云に衆皆感服ーて寔に然
と應ける。當下成勝に通能正義韓錦兄妹の料らぎ神の示現とぞ。只管稱
讃且に云。我們に然る辛もるー。峯張韓錦も冥かー。我身に和田奈良櫻見
越松鶴脛鴨脚と共に六名軍敗れて難義のとり。敵の頭人兩三名に疾と負せる

のゝゝ不一。免果べくもあらざる者不防守杵臼兩叟の援兵によりて生ることゝなる老兵の遠慮時に恢々。躬方の雜兵東西より集る者三四百名とゝなるも兩叟の軍功なるべき告るを季彦趙心に推禁めく膝を找め不古とよ彼折風歇て輒く敵と戰ふ很しく已もの武勇ふあらび閑廂師父の貸めるり。靈符と旗竿の梢ふ附一が其感應めで あらんぎんとふふ成勝正忠に小也々々と心ゝ俱ふ閑廂和尚ふ向ひて師父の法驗掲焉なる彼とり怪風鎮りて大敵と戰ふ退げ一ふ只是師父の賜へ有がたきまで不ぬ法力と知るふ足れりと謝まると閑廂守あゝ者古とよ彼禁風の秘符ふあも貧道のまとろかまふあらぎ三千稔だゝり前つ比大和なる如々来禪師東國ふ行脚のゝり當山ふ杖を駐めて辱く一宿あり一が貧道則法問の序次なるを禁風の符と乞亨一めたの所以ふ這地のゝ乳候夏秋毎ふ風烈くて五穀と損ふとあれば檀越及士人の為ふ資助ふ做ふとをきりら。如如来師父の志の切なると感得ぢめゝて其詰朝別ふ臨まを禪師則筆を添て。

禁風の秘符一枚をのゝ七貧道ふ取せめゝ足とりの後夏秋毎ふ風烈沿日八件の霊符竿の梢ふ貼一々三門ふ出ま一が疾風動て鎮りて甘出維一郡のゝゝ隣郡他郡ふ至るまで田圃ふ障りあるとゝ法驗既ふ効ありけれ今日防守杵臼ゝの出陣ふ風尚烈一かりけれ貸て資助ふ做一ゝゝと說れて席上阿とゝゝふ感嘆せざる者もゝ。如如来禪師のゝ一も人の噂ふ守れども思ひ一ゝゝふ新なる法驗とを最有ゝけれ皆共倍ふ稱ゝけり法譚既ふ果一が周晉比丘尼ふ勝と找め通能正義韓錦兄妹うち向て。その義ゝを祝一て這回義士ゝの補助ふよりて鳥丸と世ふ出ゝるべし。その鈌ひを演ゝるめを通能ゝも相慰めを其貞實と年来の道心堅固を稱賛を是時既ふ更廂て子二刻比ふゝ一が正忠と成勝ふ閑廂和尚ふ請を道く夜ふ深て師父と尼御前ふ退せめゝ已ゝ尚明日ふ隊配とふ定むべれとふふ閑廂ゝも領ゝく。

丸い尚這里に侍りて衆議を聽ん後学ふるべし誘々といそぎ出ん周亜父は心ざまに
は義士等に向ひ告別して共に奥へと退りぬ當下峯張通能の正忠成勝は譚るやう
鄭国の神女の喩言は都て衣裳の傳染香い藥とのそ燻まべしとのられしと今よく思へば
要ある言ふ似たり高嶋家傳の仙丹い痍と痍一骨を継ぎ但死と起きるまでは外道の
幻術を行ふ者或い妖怪変化とも濺被れが立地ふ對治もべしとのられる石見父の日傳あり
今幸ふ其仙丹い已ぞ主僕俱ふ秘蔵まる貴く人ふ施したれども今尚當用ふ足りぬべし
然れば明日の闘戦ふ又彼枉津の黒闇天敵の陣中ふ顕出るが這仙丹を濺被て拗ぐふ
あくとゆうべと議まを正忠ふ申して現究竟の神藥なれども明日も亦野戰を敵と
交るふあるべきに濺被るふ便るらん狡非除水弾児をとのそ弾被まく欲まるとも一箇
の敵ふゆるれい他ふ衆兵ふ遮られて為ぬ行かがらるべし。あの理と思ひゆるまやと議まれが成
勝沈吟じて并も亦拙策るれふゆるべあり今郎と煩まえ我仙丹を撮小るが硝子の

壺ふ藏めて枉津天女ふ擲ぐふ壺い則亦非粉ふるそ仙丹必彼身ふ塗れん茨小十郎
主の投石の精妙在昔の三町礫ふ伯仲を百發百中徳べるぞの義を憑奉るとい
まて正義阿容る色るく并を左も右ものとるぐる拙父已が技藝とのそ考へべしといい
がるる失ふい敵射方ふ矢るのまるぐ眼策忽地亀餅ふるらんと舜ふを樅二郎撫禁
めて然るといのい外ふ人ふ謙遜辭讓い時ふあそよらめとらぐ人重作も共ふ外ふ成と
成らぐるい時運ふ在り高まの嘗より水い漏とも小十郎主の投石ふ為て陷れ所るべ
憂る物い硝子の小壺を目今るぐ行のまと父ぞ押絵も然るとと心ぞ白猪の宿所
あるるべ弥生の雛棚ふ用ふる小る硝子の壇も我狩りかども并も亦ふるひ
るとと困じ世ん術るぞるを趙い法師尉めて諸君子其義い心安れ閑雨師父の焼
香毎ふ用ひるい香盒ふ硝子ふと撮小ぞ為ふ日不憶るく野納ふ賜りたりけ
まば藏めて行裏衣の中ふ在り今合出て見せまるる所用ふ足らぬ幸ひるらんとのられて已が

子舎ふ退いて含む歩一束ゆう其香盒を見れば果して硝子の高絶ふ一寸許上下圓く
まを握るふ堪う成勝是を受戴いて小十郎主豆足ようらぶをとらいて遽與を正義。
受取り握り見て思ひしるも程よく重り是ふ仙丹を籠めで擲ふらく好んとのいつ返
せば縦三郎八重作押繪も以ていた珍器の即坐ふ歩一を感嘆を當下防守丞彦八正
忠成勝ふ向いていはう仙丹の經驗疑べくとへも是ふ加るふ如如来禪師の靈符を
のそせば玉ふ金を添るが如く利益ふく莫大ようれも對陣の始より靈符を掲げ歩ば
枉津天女憚りて顕出ざるもあらん機ふ臨変ふ応じ宜く計ひゆらむをとのへ正忠點頭て
勇士の大敵と戦ふ仙丹秘符の冥助とのこ憑ふ本意ふあらねども經驗而るこるけ
れば。いかて如くせざらんやと応て躍く成勝と共ふ魚丸ふ稟を歩う軍説を聴せのぶ如。明
日ふ稠の闘戦ふ結れば君も出陣まをして時運を試ゆかしとられて魚丸怡悦ふ堪ず。
恭ふく答るゆう。我身ふ乳臭ふ少年ふて大義を謀るふ足らざるふ幸ひふて諸君子ふ

愛顧せられて明日の闘戦ふ王将ふ倣りて出陣せれ。最辰ふ呼ばるる頃とりて逆を
討ふ三戦三戦ふ至るまで名を退給ふ知らるく上ふ死まるとも怨ゆ又只教ふ依んのこと
然しも雄々しく大人しられ合ふ趙心笑へげふ小らば明日ふ已ゆも腋子ふ従ひなられ短夜
これば出陣の准備をいそぎゆかれと稟志を成勝見るて既ふ軍説の果れば明日の准
備ふて緊要るらあとふ正忠も亦ふ全ふ明日の歩ふ時候の出陣るべし。衆皆ふ美をるるゆとふ
ふゆう。泄ふ疾退して躬方の士卒ふ陣徇せ其餘の要事ふ如此々々奈我四短平も
疾ふられとられて三箇の小頭人ふ為るふ果てぞ退ける。話説分両頭然程ふ鎌野伍
六郎健宗ふ枉津天女の冥助ふよりて闘戦十分の勝を為て最快く歩りるるた
る敵の頭人ぞ一箇ぞ敷ふ捕るを反て躬方の頭人ぞふ深痍淺痍と負ふ歩ば
ぞ猶飽ぬ心地ふ躬方の士卒を集合て降人毎を牽せ。鎌野の館ふかへ歩ける

程に。狂津天女ハ幾間に狭書院に立て俟て居る。健宗かくと聞知りて戎衣脱捨衣改めて養母大刀自と共侶に慌忙て書院に出て三拜なして宣にまう天女の神恩須弥より高く然しも予剛たる怨敵を一時に敗を走せしハ最愉快の造化なれども遺憾ハ敵の頭人大江杜四郎岑張柒六ならいさらに名ある賊徒を殺しぬれど反て躬方に金瘡見ずかりし迷惑仕りぬ天女無量の神通力も只猛風を起せしのミにて敵を殺さぬ疎ある欲ならで明日の闘戰にハ尚神力を施しめられ賊徒を迯さず擊果さバ能與村なる荒祠を葺更て祭奉ん急々如律令と啓されバ狂津天女うち笑て健宗我のなるがら。約莫今日の閧戰に名ある敵を擊捕ぬる躬方の頭人淺瘡を負し我神力の落たるにあらず信る者の施れ故に汝達えんず諸頭人從々の士卒まで一致して我を念ぜバ必也明日の閧戰にハ我亦妙なる段を施し敵の奴們漏る者なく血に染て死ん倘又深信疎ならバ負ずとも我を怨む彼阿魏奪する奴們ハその古石の像く彼身を

守る神なれにあらねバ実に容易の敵にあらバ明日ハ夙めて出陣して又犬掛を敵と俟べし。その折我復出頭せん腰輿を忘そと言詳に宣示せバ健宗唯々と稽首して神詫をまちまちぬ但躬方の頭人ハ各其身に金瘡あり明日の擊に不自由なるん良藥あらバ教ねへとこふと狂津女咲あくまたる我今宵加持すべし瘡ある者ハ明るを俟ずで悉皆平愈せん然ながら苦労にあることかれとられて健宗喜悦に堪ず大刀自ハ始より水晶の數珠摑鳴して專唱名祈念して在り這時繞に頭を抬げておそるく宣示まちう尊神託宣かるの如く明日ハ怨敵伏誅せバ己が母子の幸のミならず當郡士庶の大幸なるん然る時ハ我大刀自に百も二百も千も二千も壽命を授けたまへかしと念ずれバ健宗も亦頓首して我らも所願母に同ど利益を仰まると共に戴足禮拜して頭を抬れバ今まで有つる狂津天女の形貌ハ見えずなりにけり當下健宗ハ例のごとくして怪まず大刀自を先に立して倶に後堂に退きて牝嶋番太守実を召よせて天女の示現云云と宣示して又のあら明日を

人王勝天
天定勝人
此段十頁より
下ゐ見えつり
みちより
はるこたる
ろうぬし
八手作

うを丸
ちよう丸
ふ〜ろ

豆開ふ出陣せよ旨と苛三隈八郎ふ仰て蚤く陣徇せよ。勿論士卒ふ至るまで深信並て懈
るべからざ懈る者ハ必斬んとの弓も隈ふ下知せ。と詞急迫く吩咐れば牝鳥番太ハ二
い羨と外面投て退りけり。有右衛の詰朝健宗ハ我衣ーて近習を左右ふ従へ。弓閃ふ立ち
発見ふ尻をうち掛れふ程ふ集ふ諸隊ふ頭人鉞持隈八鬼薊苛三と首ふ蛇塚真武
四郎和上六牡丹五竹木虎狼二平鬼黒九郎館内也刀斎ふの他侍品三千名雑兵合せて五
六百名馬ハ口剛ふを嘶ぎ鎗ハ柄の長ふを厭ふ虎陜まで集合さ然れハ身ふ痛ふ
者一夜の間ふ皆愈て奔走障ふとハ。ふ開ぶ中ふ竹木虎狼二ハ昨日和田正義ふ投石ふ左の
眼を傷られ鬼薊苛三ハ股ふ深痍まで乾ねば馬ふ乗ぶて。と禀まふ故ふ健宗則件の二
人を留め牝鳥番太を代と隊配都て昨日の如く又彼腰輿を先ふ早ー天掛投て打
せけ。軍装の目覚ふを見て時彦是と評ふく。健宗漫ふ妖神を信仰ーて天機ふ忠
陣者ハ凶兆ふ有らざーんや。狐狸と征ふる者ハ彼狂津女ハ狐狸の魅ーふ有り

ぎも妖怪ハ狐狸と憚ふ。和漢の先蹤疑ふ[illegible]況邪正ふ克ふ勝負と未然ふ知ふ[illegible]
ふ[illegible]ける間話休題這時阿甦寺ふ義士ふ軍兵五百餘名を三隊ふ分て韓錦樅二郎
茂洋和田小十郎正義先隊の頭人ふ奈良櫻八重作次世を副と鶴脛奈我四郎鴨
脚短平ふ是ふ従ふ二の隊ハ則大江杜四郎成勝峯張米六郎通能頭人ふ勇婦押絵
副と見越松時八ふ是ふ従ふ第三の隊ハ部領の輙鬼丸主将ふ左ふ防守坑四郎季
彦ふ右ふ杵臼程栄入道趙心ふ和田十郎正忠と後見と為丸這日の打扮ハ春慈
紙の身甲ふ精好の奴袴を張せ白鹿毛ふ五彩の綵糸を以て菊花を縫ふ戰袍ふ
被り金作の大刀ふ彪の皮の尻鞘掛ふを鵯尻ふ佩ふ背ふ駝鳥を三羽の征前ふ
握持ふ重藤の弓連銭青毛の三歳駒ふ雲珠鞍置て優ふ跨り紫幽ふ絳の
繁緒鈴々ふ鐮尻の音鼓ふ[illegible]たる足掻の御音勇ーふ[illegible]ふ者ふ年ハ二八の美少
年顔ハ三月の桃花の如く姿ハ秋山の丹枫ふ似ふ正ふ是幽谷の鶯尻春と待ふ

枝に遷り雪中の寒梅東風に吹れて開かまく欲するも斯やと思ふ計なる菊地部領の家花
號十六葉の秋菊も色妙に染做したる三流の旌旗夏の朝風に吹せつゝ器械執たる数
百の従兵威勢宛虎彪の像く隊伍齊々整々たるに程なく鏡野の先鋒の頭人牡丹
五黒九郎也刀齋ハ二百有餘の隊兵を従へて又彼腰輿を米に舁するを這日の大
將なる長臀の邊に端なく敵と撞見しける當下健宗の頭人等ハ共に馬を騎出しつゝ
四下に響く聲高やかに否これ寺龍の盗児毎昨日に懲りずも又推出き虎の影舞を為すなく
ならや今日ハ鏡さら覚期をせよと罵りて鎗を拈りて嘯いて竟れば義兵の頭人樅二郎八重作
らハ怒に堪ず憎むべし逆徒の廣言天運既に循環して主將の出陣を知らざるや天罰思ひ
知らせんぞと悪言の果さず三騎相並んで衝出る鎗の刄尖を受流しつゝ相戦ふ牡丹五黒九郎也
刀齋ヤウヤウくの猛者殺耳も早苦しげに喘えて二の隊に在りし蛇塚真武四郎鍼持隈八
ら是を見て先陣倘敗るべく代りて敵を挫んと共に隊兵を找る程に健宗も亦貼て

ならで天女ハ出頭遅れしや。今日も亦折を違えむぞで冥助を垂なんと馬上に合掌て默禱
あて憶ず馬を找進て左右に従ふ近習の毎後陣の頭人牝嶋番太有司等も共に後
れじとて主の後方に續れける既にして黒九郎也刀齋牡丹五ハ義士の頭人樅二八重作
奈我四短平等と戦ふ程に腕衰へ鎗の手乱れて各浅疵を負ひはしけれバ流るゝ鮮血に
身を染て危く見えたる折から健宗の陣頭に杠居たりける腰輿の裏より一箇の
天女閃きて腰輿の上に立顕れて手に抜持たる剣を抗て揮晃かす程しもあらせず和田小十
郎正義ハ躬方の頭人樅二郎等の敵と戦ふを外に見つゝ此騎を乗退けて狂
津やあると張ふる那時遅し這時速し件の光景を見てしより馬に拍打れ馳出て
右手に合持たる硝子の小壷を擲ち修煉の精妙寃違ず狂津女の肩間に撲地と
打中れバ礫の硝子紛と砕けて内中に籠たる仙丹の那身に塗破ると見えし狂津ハ
一聲叫びも果ず身を仰反して作る時持たる剣ハ手を離れ背さまに怪飛で後方に

馬を立て在りける健宗の胸頭を馬鞍と擘く刃の鋭味怪むべし健宗の頭より魚く地上ふ
在り軀も馬より落ふけり後ふ人知今這時杵臼入道趙心い霊符を早く今歩て鞭
の梢ふ挾ミつ敵の方ふ推向けて如如来禅師の法號と唱て冥助を祈け霊符仙丹両
の郷音の物ふ應る如く狂津の幻術幻れぞ彼ぶ持る剣を健宗首を斬られけ
意外の奇特ふ義兵の一軍頭人士卒推並て感嘆の聲と合け是ゆ驚く逆
徒の頭人真武四牡丹五黒九郎也刀爾ふ戦慄れて敢戦ふ心る引外く逃
る。樅二郎八重作ふ逃ふも遣ふ大喝一聲突ふ鎗の刃尖ふ黒九郎牡丹五
或ふ胸前或ふ咽喉と刺れて馬より落ふけり又也刀爾端高い奈我四郎短平ふ前後
より刺挾れて既ふ深痍ふ堪ざれ是も敢ふ斃られけり開ふ中ふ隈八と真武四郎ふ蚤
くも路を横ぎて逃るを透ざ追蒐来ぬ義兵の頭人勇男女是則別人ふ峯
張通能と押繪八蓬ふ返せと呼けて間近く追逼ふ隈八真武四郎見ふて敵ハ

男女二人ふ過ぎ猛ふとふも續く兵ふ結果けて徐ふ呑と咲ふ共倍ふ馬と其方
へ乗返せふ程ふもあらせ通能押繪馬を花て追蒐来ふ健氣ハ鉞持蛇塚面と
豫部ふ其里ふ退と呼けて通能ハ九尺の短鎗押繪ふ八角の棒とて斃ふと我
ふ隈八真武四物々ふと大刀抜殿羽ふ閉戦ハ十合ふ至ふ隈八と通能ふ持る
刃と反落されて剰右の肩尖を下高ふ刺れ忽地撞と落馬ふ一巡時ハ起も
けて真武四郎ハ右の光景ふ敬馬怕れて逃ふ押繪ハ透ざ八角の棒ふ天窓我
礫と撲ふ男婦の裏迅雷の隊ふ鬼ふ異ふ真武四郎ハ半身と刻衣れて馬と
平張け浩處ふ時ハ後走ふ来ふけれ通能金く聲と呼て其奴と縛ふ
ふ時ハ索とかけふけり然る程ふ健宗の後陣ふ頭
人牝鳥番太守実ハ思ひけるハ凶変ふ敬馬ハ呆れて遠くふ四五首の近辺と無
参降参と吸ふて敵ふ近つハ来る程ふ奈我四短平立向と雑兵ハ皆郷せ敷珠

繋ぎ合せ、ぎりけり。余る程に正忠・季彦・趙心・魚丸と守護者、成勝と二隊と合して、馬を早めて来たる程に通能の時に生拘限公を牽せ来り、押絵の撲刻衣なる真武四郎の首と合して藤蔓もて縛して、実検に入れ、さて世話に偽て蛇を殺すに克其首を推ざれば、又生て祟をなすべし不用意なりも押絵の勇悍蛇塚真武四郎と戦捕に克其天窓を撲裂あり。寔に其美に稱へて人皆笑局に入りけり。その他韓錦奈良櫻弟兄の戦を捕る。壮丹五黒九郎の首級、奈我四郎と短平の相戦に捕る。也刀斎の首も皆含生て共に実検に入れ、かば魚丸の其功績の孰も勝れを答さらる。就中和田正義の軍功を第一番とすべし。出没不測の妖婦狂津と只一礫に打殪したる修煉の和漢に傳稀なる彼亡骸の有や無や。索ねて見ばと仰ぎれば正義則兼りて隊兵を将て腰輿の邊と限る索果て亶沢狂津の仆れ邊に只健宗の首のみ且故なる木像の三四箇に砕るあり。又狂津女の持る剣に長二尺五六寸あらんと思ひしに、その剣にあらずして、九寸五分なる短刀の其頭に送て

あり。かの鞋に拾ひ、もとまのあたりに共に取出て見せまゐらせれば、魚丸いかにも驚く、諸頭人駭然たらざるを者なく、尚疑ひ解ざりける。中に通能に正義に向ての曰、和殿も大抵覚めべし。昨日能與の池邊なる賤婦の説を思ふに彼荒社に在りと答へ、黒眉天の木像に抱きて鏑野の館に在り。大刀自母子を貪りて、及び赤樫三郎も押絵と共に短刀を列々と見て、這短刀に豫知る鏑野の什物也。鏑野前と名つけ、傳来の由様々如此々々の事なり。始に已是を知らば、軍的に誣られて、究狂の牢に繋れも、その短刀故なり。今に狂津の手に入て三尺の剣と見えに、亦是狂津の幻術也。其術敗れて殪る時、短刀に彼を離れて、怪死で健宗の頭顱を戦落に、怪に過ぎず。汝に出で、返る大刀自夫婦母子の悪報是に至て知るべし。而已とのふ衆皆有理と感じ、齊一嗟嘆きけり。既に健宗の首実検果かば正忠則魚丸に禀き、妖怪鎮治の軍功、獨正義に帰すべし。彼仙丹の奇效に在り。其仙丹をまらせる。大江峯張の大功に長殘

の上ゆゑ。恩賞ハ評議の上異日の御制度ゆ依るべき筈約束偶人の障子を作りて異
国ゆも先蹤あり。奇事記ゆもありつらん。今ハ正可ゆ覚ねども洛陽橋ゆ石の偶人夜々化て
小児ゆ戯れ人ゆ戯れと見えし天朝昔相模ゆ妖地蔵も亦旦を同くして語るべ。然れ黒
間天の木像も其類ゆ出たるなり。速ゆ焼棄て妖氣を絶ゆ。又鏑箭の短刀ハ既ゆ是
不吉の物。是ゆも火中ゆ焼燼して鳥獣ゆ啄ませるゆ勿論ゆ及べ。それゆも尚ゆそ鏑野の
館ゆ推寄せ大刀自を誅ゆ奴ゆ誅して御本意を遂ゆと詞急迫く促せば。
魚丸趙心季彦等一議ゆ及ぶ其議ゆ任せて黒間天の敗木像と鏑箭の短刀ハ正義
宜く奉行すべ。ゆ他生拘児と。健宗以下の首毎ゆ時八奈我四郎短平等ゆ奉て。後陣ゆ
在て奉りて来りて。一の隊ゆ二の隊ゆめの如く隊配をゆ推寄らゆ有斯一程ゆ鏑野の
城館ゆ荏津天甘ゆ術敗れて。健宗横死ゆ逃ゆ遁げ雑兵の生ゆ捕られて
知る大刀自以下留守ゆ頭人鬼薊苛三竹木虎狼二有司等ゆ至る迄。胸を洗ふ

怕惑ひて落支度をするゆ早大刀自ゆ従ひ猶龍城ゆ輙れ者の吊軍を
ゆべ。とて撓むゆ苛三虎狼二有司等ゆ俱ゆ諫誘ゆ大刀自ゆ此を
聴ゆ怒罵るゆ王僕忽地不和ゆ苛三虎狼二有司等ゆ陽ゆ同意ゆ面色
ゆ大刀自ゆ由断ゆ透ゆ窺ひ金銀を掻攫ひて逃ゆ。ゆ示合ゆ程ゆ魚
丸の大軍数百名推寄せ来りて苛三虎狼ゆ計較違ひて。ゆ術ゆ
隨ゆ。得大刀自を刺殺して寄隊ゆ降参ゆ。不忠の刃を研ゆ。既ゆ義
兵の頭人和田正義韓錦樅二郎奈良櫻八重作等ゆ先鋒の軍兵二三百名を従
へて真先ゆ找ゆ鏑野の館を捕綱て攻潰んと競ふ程ゆ忽地前門の塀裏
より公平の頭ゆ括着る笠を三四箇ゆ。ゆ近世兵家の故實ゆ降参の照据
れ正義樅二郎等ゆ士卒を禁めて敢動ゆ後陣へかくと告げ。ゆ魚丸ゆ諸頭人
と共ゆ隊兵を率て来る程ゆ逆徒ゆ前門を颯と開て士卒僅ゆ二三十名左

右二側に跪居て、則寄隊を迎け。然れども正義樅二郎等に倘詭の計に陥らざらんと思ふをもて、八重作等と共侶に士卒を率て找入りて、内外隈なく渉猟しに伏兵なし。あるところ敵兵悉く落亡て目今送留る者四五十名に過ぎけり。然程に魚丸左右に趙心季彦に従へて正忠成勝通能押給。玄関にうち登れば鏑野の有司出迎へて、恭く書院に請待。然れども寄隊の軍兵を推續ぎ、稠入りて四下に坂言備せざるもなく、又時八奈我四郎短平に生拘児を牽せ来て、俱に書院の庭に在り。當下鬼薊苛三竹木虎狼二の一箇の首函を携て有司四五名と共に伯に檐廊より上り来りて、恭く訴禀せり。魚丸君上に在ては臣等御武徳を怖畏て降参せまく欲するに、単大刀自の不の字とかのみ罵り狂ひて、已されば只得首を賜りて、實検に備ぬ。ついでその勸賞に命を饒させぬべし。と喝言がまく願ふ。有司もまた當郡の戸帳と金銀米粟を録せり。大冊子を相捧げて共侶に禀せり。大刀自曰

害しなる者に非ずとも、寸功あらざるに免さんと思ふなり。第一番の要緊なる簿帳を呈閲仕りぬ。ついで宥免あれ。と弱果て陳ずれば、魚丸左右を見かへり、和田大江の両兄意見いかに。と問れて正忠判きらく、抑苛三隈八の奸虐なる年来範的の悪を資けて不義の利を欲せざるとなく、範的不慮に健宗に較べ果されて怨とせざる反て家に従ふ。又他を資さる其罪既に極れり。然れども天の冥罰隈八を陣中に生捕れり。苛三虎狼二を留守に在りて悔もせず。既に事の急なるを見て王の養母大刀自刺殺ぬ。已その首を續まくも實に是鬼薊の鬼畜なる虎狼二の虎狼なる恩を思ふに、其を知らず五逆十悪の罪人なれば、彼身を八剣に刺して乱臣賊子を懲しめ、兵毋其奴を牽出して共に死刑に行はんと烈しく下知に苛三虎狼二敬畏怕れて逃ぬ。敬言固の雑兵走て鬼薊下に走り、結扭して八重作時八検使に立て、躰て隈八苛三虎狼二の外面に牽出して、捉の隨に行ひて首を實検に入れば、健宗大刀自の首

級をとらく其隊の頭人牡丹五郎武四郎黒九郎也刀斎并に苛三隈八虎狼二の首送
もの皆申明亭に梟さるる又黒間天の木像と鐙等の短刀は正義既に奉りく共に燔
棄て灰も留めず是より先に降参の有司等と庭に牽れ番大近習に苛三虎狼二隈
八の刑戮せらるを見も守もして顔色都て藍の如く只平伏て在りけるを李彦と趙心は共に
佛意にて魚丸に少上て正忠成勝に乞ふ由申し現銭に克殺を去るに和漢仁君の善政な
ま正忠成勝は已とを沼ぎ件の有司等と牝鳥番大は谷耳を刺棄て俱に嬰児に彼を
ば又生捕の近習等は背を二百鞭撻せと共に追放せべと掟る況名も高雑兵等皆
郊外に追退け又大刀自に仕る女房は各其親里に於て遣へ這は亦魚丸は趙心法
師に返却の霊符を齎して阿甦寺に遣て用廟和尚と實母周晋比丘尼に敵
対治のよを告知らせ次の日倉廩を開きて窮民を賑し士卒に物を賜ふと各差あ
て且豆裏に兵粮軍要金銭衣器械を調進をる良農巨商を召よせて一倍の賞禄

あり皆千歳を唱ける亦後又魚丸は防守李彦と韓錦樅二郎を使とて
越後の長尾景春に怨敵対治のよを告げ景春其大功の速るを感心のあま
て異日京都将軍に少上て為に恩賞を乞ひ亦郡司に補
任して本領安堵の御教書を下されけり是に魚丸は小名と改め部領郡領武魚と
稱せらる然れば今番の歓びは只是のみあらず扇谷朝興も先非を悔て和睦して武魚
と好を結ぶ及び武蔵の舊領を返されけるを甘羅の外に隣
郡及信濃に在り昔年武蔵滅亡の時逆臣範射媚て朝臣に贈りしを扇谷
の所領に帰りしを其隨返却せられしを孝感の致所と武魚微すに富一倍を須
れば阿甦寺に坊料を加増して親同胞并に菊池武俊夫妻の為に追善の供事
年毎に間断あらざる又能與村の氏社を葺更て旦昔歳大刀自に奉られる所の
の木像を彼池より拯出させて故の如く是を祭る亦後能與院を再興して堂大会落成

世の中は梅の花
松の月ひとり
うけてあさまつぬ
春秋
作者自題
あさで
おしを

うを丸
ゆきまつ

の時寺料も亦舊に因て其法燈を續せり。然れば和田正忠を家臣として李彦趙心を
老嚴と。韓錦樅二郎茂洋。稲小十郎正義兵頭。奈良櫻八重作次世。習
頭と。その他見越松時八鶴脛奈我四郎鴨脚短平等を受る所の俸禄少くして知亦郡
領武魚の純孝多。實母周晋比丘尼の為に閑居の室を造せり。老実なる女房と女童我
名狩隷在らせて。朝夕安否を問ふとて。米地隈を治りしが武魚則李彦の女兒拔
ふと内室とを。拔ふは素より孝女。容止も醜。且其父李彦の孤忠を。菊池
同族の舊臣。又部領氏も菊池と同姓の好あれば正忠を料簡して今合巫の教びを待
這折とて。成勝通能媒妁して韓錦の女を押絵と稲田正義に妻せり。ある武勇力
藝一對の夫婦。亦世に復ふ。ぐなく所人皆是を羨みけり。されども正義の父正忠は妻を
て紙袴を欲せば職を辭して妙義に遁んとす。又杵は趙心。樂門人今は俗務に預ぐるも
も。身の暇を賜て何雖寺に閑居せば。武魚一切是を饒さず。我身尚弱冠なれば忠

臣賢者の補佐なくば。今戦國の世に立ぐ。故に留りぬべきを。枉て留りぬべきを。故に
中に成勝通能は一時遭際の旅客なれども。義に依る所已に久。悄地に武魚を試て。幸
ひに志を功なりぬれば。告別して去らまくとけれど。武魚拔ふ韓錦同胞李彦趙心和田父子別を
惜みて留る程に。享禄四年を盡て紀改りぬ。安下甚生重
説。未朱之仗晴賢は彼夜丈夫人益九郎と翼に乾父吾足斎の宿所に潛入。吾足
が貯へる金子を。義甚弟多晩稲。晩稲。樅攫まく欲。其計較齟齬を。益
九郎は吾足斎に虜を負せけるのみにして。其門塵を成勝通能に掃捕。彼身庭
る乾井に躍れて。晩稲の狂死。吾足斎の職悔の條々。九四郎阿鍵小忠二郎の来
會の顛末を。心ともるく。安知ら外視と窺ひ潛。松木樹伐り塀を乗て。逃去らまく
の程に。通能は見出されて。席鉞の銃鋭を打。ける邸舎を。墓く外面に抵下して。
足に信して。逃去るめるに。素より無類の方人なれば。まぐ遠く立去らぬ。甲夜に

路傍老物の蔭に隠棲する裏と昔立て。今年十一月周防に赴くに。
奴の親なる五両金なく盤纏に足らざるあらざ先や三池郵に赴いて宿六阿加々を呼
誘ひて此の盤纏をのせんと猛可に計較む奸智の本性其里に路を横ぎる。
彼邨投くらそだけ畢竟朱之介が其詰朝宿六を呼訪ふて。後の話説甚麼
ぞ。開き又巻を更ゆ。且下回に解分るを聴れかし。

村田

新局玉石童子訓巻之三十終

綉像畫工　一陽齋豊國

一陽齋

淨書筆畊　谷金川

作者曰本編三十七回以下、重陣殺伐の文多くして綉像に甚だ
甲冑の人物混雑して坊多く、故に其人の自尽に臨み手に健宗大刀自
の伏誅の契に動機の為必事を定められる事の正巻に言ふ所なり
文章譲りて且無巻五巻の紙数断々増して六百頁に及ぶ
事を作者の主盤違ひ之看官の得用なれと云戯房のうちとも
出た板元の書肆文溪堂に代と贅するものなり　路嬉代書

○家傳神女湯　一包代百銅
○精制袞竒應丸　大包代金一朱　中包代金二朱　小包代五匁
○熊胆黒丸子　一包代五分
○婦人必用の必薬　一包代六百銅
制袞本家　四谷隱士　龍澤氏
弘所元飯田町中坂下南側中程　たゝ沢氏

新局玉石童子訓第七版

第六十一回より第六十五回まで五巻　推續近日開板

代稿作者　澤清右衛門

弘化四年丁未秋月刊彫成
五年戊申春正月吉日發行

大坂書肆　心齋橋筋博労町　河内屋茂兵衛

江戸書肆　大傳馬町貳丁目　丁子屋平兵衛板

小兒藥

玉匱保赤圓

一名 ちぞかい

凡養小兒宜戒敬酒肉沖臓偏生病生冷硬物涼水氷不與自無痢癖病とかへり然とりくども小兒を養の乳母豈如斯の敬を保べきやさ是世間の両親の小兒を寵愛のあまり深けまでも生育養育飲食を節に朝暮の衣類寒暑の時候その程々を宜くせるの稀なりそもく赤兒の初生より実に親にの丹誠わゝ無病延命の道とまべけんや夫小兒の成長に為さるに痘の病や脳毒も症を変ぜて種々の病とあり果は廢人とあらる類ひを唯一向に定まの発れゆう小心得て是非なる病と捨投ゆゑ如くなるは藥心なる保但て甚歎ハきゆとのべ夫小兒の煩ふ諸病多しとのべども其発原病といへ肝と脳毒の種より百病異変の症となり天の長壽を保てわさを頓て夭死の人多しさは子が家数十代因業を子孫小傳え家傳の經驗尤多ろ其中ゆゑも小兒を療治せる我専一とし奇方妙藥丹念なり代古の保赤圓も萬金玉匱の良劑ゆく小兒の藥王ちのうゆゑし俗ゆゑく丹目より小兒の藥と名号の諸方は多く有經れば亦こまた此かんの業も同ド類ひの丸業あゝんと偏屈ふゆゑめて唯當座を凌く丸散を例も合業あんどくの妙業わるゝ依知し召ざる方さゆゑ最ゆきゆゑ事あり実以てこの保赤圓も門小兒さゆ方の病ひは依く両親の辛苦は脳をゆゑ一まさせゆべし第一は海内幾億万

の小児を憐まゝ真元の氣を補養して漸々小胎毒を下し蟲を平治物驚き疳止さて気根を強くし成長の後記臆をよくさるゆ疑ひふし元来細病延命あらんと思ふ大願を発して先祖の代より當今予にいたはまで古く世上ゆ知らるる此妙薬ゆ猶まゝ普く弘めんとて絶ゆ功能のあらはれ紙告はいつまるゆ人あり必志も利欲のためふまる賣薬と賤めるよ小児の病の苦痛を救ひ壮健長壽の喜悦を與えるひ祈ら〜

主治 ○きゅうふう ○ふかん ○たいぶく ○たうさう ○はら ○むし ○ひきつけ ○がんびやう

大畧 此外の諸悪小児の万病に〜

御免 武州埼玉郡加須町

製藥所 小兒科 大和氏門司法橋精製

弘所	
京都堺町六角下町 吉野屋勘兵衛	江戸横山町三丁目 松本屋長藏
大坂心斎橋通博労町 河内屋茂右衛門	同日本橋室町二丁目 鐵屋八右衛門
同 江戸堀二丁目 播磨屋弥七	同 本郷二丁目 太田屋武兵衛
東都大傳馬町二丁目 子屋正兵衛	同 小舟町二丁目 丈屋太助
尾州名古屋舟入町 中屋久兵衛	江州日野大入保町 西村市右衛門
奥州仙臺大町 熊谷屋善兵衛	下総佐原橋本 正文堂利兵衛
上州桐生五丁目 石井五右衛門	勢州桑名片町 日野屋藤兵衛
信州上田柳町 盧田屋佐久助	東海道藤川十三町 三原屋清助

順補丸

黄んたいどうのうあらはるるもの小半剤(百二十四)銅

○第一顔のいろ黄なるみむくとも足表に見ふよう
○態ぐつくあるみくつ胃そうたるきあるおよう
○めぐと氣ぐちまうふゆく寢るあと成とのむよ
○肩たまり背まぢ ひまたまる足だるきよ
○惚 身血のめぐりあしく爪ちくれるまくそるよう
○たちまち胃つえむ痛を腹ふのまりあるよう
○積さーちみ氣をーくむ絲やけあくなるよう
○月水遅ふみ或いはあ月又は三年も来ずよ
○常に大便ひけつーづたり目まひ立ぐらくたう
○さんたいくーくひざちうね労症のとくぐらく煩ふふよう
○男女小児ゆのぐちゆ物ぐとれのきわーく何となく熱
此ゆ病ひとゆうぐぶらくつがらつまる成用ひくゆるよ食性するるくこうひ初

○凡病ひを患ふるに先此能聖旨を[illegible]我病ひ[illegible]
[illegible]古今稀代の霊薬[illegible]
三年五年と種々[illegible]
[illegible]或ハけ[illegible]その痛ミ捨ておく者[illegible]
業用ひさる病ハ[illegible]深入の[illegible]
方紙くひ紙[illegible]食[illegible]用ひ全快[illegible]古今本能書ふ[illegible]
○[illegible]の病根ハ心[illegible]脾胃ハ[illegible]
治しがたく[illegible]
用ふるに[illegible]
用ハ全快[illegible]補九ハ第一[illegible]調和[illegible]増む
を[illegible]血の[illegible]陽[illegible]順[illegible]下部[illegible]妙[illegible]

本家　両國横山町二丁目　大阪屋半藏

京都賣弘所　蝟藥師通東洞院東入町大和屋彦右衛門

御府内[illegible]町[illegible]浦[illegible]
[illegible]